

# 聞名仁教

第 138 号 毎月発行  
(発行日) 2022 年 3 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp 郵便振替「東本願寺  
護持基金」00930-7-146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 大事と小事

佐々木蓮磨

岐阜県の郡上ぐじょうに、楠秀丸という篤学厚信とくがくの名師がおられました。あるとき自坊が火災にあい、聞信徒はもちろん、

一般の人たちが集まり騒いでいるとき、師は独り法衣をつけて門外に出ようとされるので、集まっている人たちは、師が火事のために少し気が狂ったのではないかと案じ、「先生はどうかされましたか」と

尋ねると、師は「今晚は某家へ法話に行く約束がしてあるから、火事のこととは皆さんにお任せして、私は法話の方へ行きます。寺の焼けたのは取り返しがつきませんが、後生の

一大事は取り返しがつきませんから、私は法を聞こうとして待っている人を、捨てておくわけにはまいりません」とハッキリと答えられたということを書いておきます。

この話を普通の人に聞かせると、おそらく異口同音に「それは変わり者だ、常識を逸した人だ」と評するでしょう。

しかし、人間の常識というものは、ある一つの仮定の上に立って作られた知識であり、規約でありますから、その仮定の世界においては正しいと言われますが、その仮定の世界が否定された場合には、三文の値打ちもなくなるものであります。

にもかかわらず、常識を絶対の真理と見なしてるところに人間の大きな迷いがあるように思います。昔から真実を求め、真実に生きようとした人たちは、すべて常識はずれの道を進んでおられるようです。例えば、釈尊が王宮を飛び出して、山に入られたこと

にしても、また親鸞聖人が、二十余年も教化を施された関東の地をすてて京都に帰られたことにしても、ちよつと常識では判断し難い行動であります。

ところが清沢満之師は「私は親が死んだときにも涙を流さなかつたが、釈尊伝を読んだ、シツダッタ太子が恩愛の情をふり切つて王宮を出られたときの心境を察したときには、思わず落涙を禁ずることができなかつた」と述懐されたそうでもあります。それは地理的にも国を異にし、時間的にも二千数百年を距つては

ありますが、人間の真実の願いに変わりのないことを物語っていると思います。

世間の常識というものは、その国、その時代の社会生活に都合のよい方式を人間が作りだしたものですから、人間生活の都合が変われば、今まで正しいと考えられていたことも正しくないことにもなるわけです。我が国において、明治維新前と維新後、また大東亜戦争前と戦争後とは、国民の常識は大変な変わり方です。ところが現在の常識に慣れてしまうと、それを絶対の如く思い込むものです

から、真の絶対を求める人を見ると、変人か奇人の如く扱うようになるのです。そこで中国の古聖老子の如きは「常人から笑われるようでない」と、真実の道とは言い難い」といった意味のことばを述べておられます。まことに穿つた見方であると思います。

古来、千古にその名を輝かしたような聖賢や達人は、その殆どが普通人と変わった生活を営み、常識で解しかねるような言葉を残しておられるのであります。しかし、そうした人たちの言葉や言動は、時代のいかに問わず、国の東西を論ぜず、人間の心の奥底に響いてくるものがあります。蓮如上人が「一大事の後生」と仰せられたお言葉などを、前時代の教えと軽く片づけてはなりません。

過般逝去かはんされた、現代における宗教学の権威者岸本博士も、最後には死後の生ということについて、真剣に取組んでおられるではありませんか。宗教の課題は、最も古くして、しかも最も新しいものでなくてはなりません。(了)

と

と

# 現代真宗問答

3

とか〈争いのない平等な世界〉などといういろいろ言われ

B 「前月号で、アミダ仏と人の関係である撰取不捨の真理にどうしたら目覚めることができるかについて今月号で述べられるとのことですが、その前にもう少し現代の真宗に関わる課題のことでお尋ねしたいと思

ます。それは今日大谷派でのお説教でよく〈浄土に生きる〉とか〈浄土を求めよ〉とか〈浄土に帰る〉という言葉を聞きます。これをどう受け取ったらいいのでしょうか

A 「こういうお話の場合、まず浄土ということがある程度自分に理解されていなくて

は分からね話になりませんね」

B 「よくお聞きするのは浄土は浄らかで安らかなさとの領域だといわれますね」

A 「ええ、一般的にはそう説かれています。その外に〈ともに平等に生きる世界〉

とか〈争いのない平等な世界〉などという言われ

ますが、金子大栄師が〈浄土は生の依り処、死の帰する処である〉というお話が

一番分かりやすいですね」

B 「なぜですか」

A 「それはまず〈浄土とは生の依り処〉であるということ

です。こういう発想はどこから来たのかと聞いてみると、清沢満之師のお考えに元があるように思うので

す」

B 「それは師のどういうお考えですか」

A 「清沢師は『吾人の世にあるや、必ず一つの立脚地なかるべからず。若しこれなくして世に処し、事をなさんとするは、恰も浮雲の上に立ちて

技芸を演ぜんとするもの如く、その転覆を免るること能わざるは言を待たざるなり。然らば吾人は如何にして世の完全なる立脚地を獲得すべきや。けだし絶対無限者によ

るの外ある能わざるべし』

と言っています。師は人生には完全なる不動の立脚地が是非必要だといわれるのです」

B 「真宗では浄土を求める動機は、これまでは後生の一大事という問題でした。いわば私は死後どうなるのか、どこへいくのかという問題が中心でした」

A 「ええ、死後に地獄に落ちるか浄土に生まれるかという問題であり、そういう問題に対してのお説教が中心でした。ところが近代の人である清沢師は、『吾人の世にあるや、必ず一つの立脚地なかるべからず』

と云って、現世に生きる人が何を自分の人生の依り処、すなわち立脚地として生きるのかと問い、もしその立脚地が浮雲のように、確かな根拠のない空虚なものであるとか、変転するものであるなら、それを立脚地に

したらその人の人生は転覆をまぬがれないではないかと言ひ、だからそういうことのない完全で確かな立脚地を獲得しなければならぬといわれたのです」

B 「そういう問いなら、現代人にとってゆるがせにできない問題ですね」

A 「ええそして、完全なる立脚地は絶対無限でなければ、本当の立脚地にならない。これは現代人にとって極めて必要欠くべからざる事柄なのだといわれるのですね」

B 「では従来の死後の問題はどのようなのですか」

A 「それは完全なる立脚地は全人生の依り処となつて下さるばかりか、その立脚地こそ死してそこへ帰する処なのだといえるのですね。ですから生の依り処としての立脚地が知らされると死して帰する処もおのずと知らされてくることになり

ます」

B 「今この生の立脚地こそ、死して私たちが帰る世界でもあるのだということ

で、現在のまことの完全な立脚地を知ることが同時に私たちの死して帰る確かな領域であると知ることにもなってくるのだということですね」

A 「ええそうです。そのことを金子師は〈浄土は生の依り処、死の帰する処である〉といわれるのですね」

B 「では浄土とは」

A 「浄土については経論にいろいろ説かれています。聖人は『仏説無量寿経』に説かれている阿弥陀仏の本願の中で、光明が無量で寿命が無量でありたいという法蔵菩薩の願が成就された光明無量・寿命無量の功德、それがアミダ仏（如来）とその浄土の本質であると見られて

います」

B 「そうすると如来と浄土は光明無量・寿命無量の用

きなのですね。では如来と浄土の違いは何ですか」

A 「光明無量・寿命無量は一体ですが、その主体的な面を如来（アミダ仏）と見、環境的な面を浄土といわれるのであり

ます」

ましよう。いわゆる主体と環境ですね。佛と佛土です」

B 「清沢師は完全なる立脚地は絶対無限であると言われたのですが、それは光明無量・寿命無量(光寿無量)のことと受け取っていいですね」

A 「ええそう了解していません」

B 「如来浄土を自己全体の立脚地と知ることが大事なことはよく分かりました。では次にどのような如来浄土を知ることができるとでしょうか」

A 「ただ、この場合の(知る)ということですが、ただ単に如来浄土を頭で考えたり思ったりしてイメージを掴むということでは知ったことにならないのです。それならそれは如来浄土の用きそのものではなく、如来浄土の観念・概念にすぎません」

B 「(如来浄土は絶対無限であって、今この私を包んでいる、寄り添っている、生かしている量りない用きだ)と、このようにただ思

ったり考えたりしただけなら、それは単なる(思い)であって、生きたナマの如来浄土の実在ではないのですね」

A 「ええ、そうなんです。頭でマンゴーは甘くておいしいと考えているだけのマンゴーと、実際に一口食べたマンゴーとは質が違うようなものです。考えたり思ったりしてイメージしているアミダ仏と、実際に経験して知られたアミダ仏の用きとは違います。仏教で覚りとか信心とかをやかましくいうのは経験的に知るところが大事だということです。単に考えて分かったと思うているアミダ仏(如来浄土)は、要するに(人の思い)に過ぎませんから」

B 「では私(自我)はどうしたら如来浄土を経験的に知ることができるとでしょうか」

A 「ここがまた大事なところでありまた難しいところでもあります。この課題のために苦しい修行を長期間する教えもあるのです。聖

人が比叡山で天台宗の厳しい修行を二十年もされたのはこのためですが、それでも聖人はなお真実にであろうことができなかったのです。このことは真実を説いている宗教であれば同じ難しさを抱えているのです」

B 「そうすると私が生きて如来浄土に触れるのは難しいのですね」

A 「なぜ難しいかということですが、実は(私)といっているのはまずは(自我)の私であり、その私の方から絶対無限の如来に触れようとするなり掴むなりすることは不可能であるといえます。『歎異抄』第二章に聖人はこのことを(いづれの行もおよび難き身なれば)と仰っていると思います。私の側からアミダ仏にであらうとしてどんな行いをして如来浄土に触れることはできなかつたと、それゆえ(とても地獄は一定すみかぞかし)いわば(助からぬ身)と仰せられるのです。これについて近代日本の哲

学的第一人者である西田幾多郎博士が『絶対とは我々が之に近づくと云ふことができないのみならず、之に向ふとすら云ふことのできないものでなければならぬ。人間より神に行く途はない』と言っています。私の側から絶対者(如来浄土)に近づくことも向かうこともできないと言われ、(人間より神(仏)に行く途はない)とハッキリと仰っています」

B 「先月号で(アミダ仏は私のいのちそのものであり、私の存在の根柢である)といわれましたが、そうするとアミダ仏は私たちと極めて近く、むしろ私たちと一体であるにもかかわらず、こちらからアミダ仏に近づくことも向かうということもできない、といわれるのですね」

A 「そうです。南泉という唐代の有名な禅僧の言葉に『向かわんと擬すれば即ち乖く』と言っています。擬すればとは私の方から掴もうと計らえばということ、真実は掴めず真実にそむく、離

れると言われるのでしようし、あるいは真宗の厚信者が『阿弥陀さまは袖ひきにかると逃げなざる』と言っています。こちらからアミダ仏を掴もうとすると逃げてしまいなさるといわれるのですね」

B 「自我の思案や計らいでは如来浄土は掴めないのですね」

A 「ええ、如来浄土は自我の分別(はからい)では掴めません。極めて身近なアミダ仏ですが、向き合えないし掴めないのです。丁度自分の背中私と一体ですが、直に見ることができないように、あるいは手はいろいろなもの掴むけれども自分の手は掴めないように、あるいは目はいろいろなものを見ることができないけれども自分の目を直に見ることができないようなものです」

B 「ではアミダ仏と私はどこであらうのでしょうか」

A 「それは次号に述べましょう」

# 信心夜話

昇道は今まで信後には金剛不壞の信心が明かに胸の中にあるものと思て居りたが、何時まで立ってもどうもならぬ、何時も胸の中は寂しい、何にもない。

いつも唯落ちる一つ、いつも唯如来をたのむ一つ。いつも唯如来の御計らひを仰ぐ一つ。

信前もなく信後もなく一念もなく後念もなく信心もなく安心もなく、唯如来に救はれて安心し、如来の慈悲に心勇み、本願の成就せる事を慶賀感謝するのみである。

(今井昇道師)

この文は今井昇道師の『病中感謝録』の一節です。今井師は信心の徹底した大谷派の名師で明治・大正の時代に活躍したお方です。信心の問題で悩む人たちの大きな光になりました。師の出版された本は全て絶版になっていますが、

念佛寺のHPにいくつかアップしておきましたので、ご覧下さい。

今井師は、本願を信じたら、心に確固たる信心ができて、いつも明るくて安心し、充実すると思っていたが、実際は昇道の心は、いつまでたっても胸の中は信心らしき有難いものはなく、寂しくからっぽであると言われるのである。

信前であろうが信後であろうが我が心の中はちっとも変わらない。一念の信心もなく、後念の有難い思いもなく、安心もない、と今井師は思い切ったことを仰せられている。要するに信前であろうが信後であろうが我が心に変わりはない。煩惱ばかり妄念ばかりでない、信心者らしいものは一つもない、と。

信じたらさぞ嬉しいだの有り難いだのハッキリしたのだという心になるかと期待していたが、ちっとも変わらぬ。煩惱・妄念ばかりの「助からぬ

奴」である、と。聞法を積み重ねていけばいつかは普通の人と違って、有難い信者になり、浄土がハッキリし、モヤモヤもなくなくなるだろうと未来に期待して聞法を重ねてくが何年経っても、相も変わらぬ我が心である。これではいかんと更に聞法に励むけど、これというような有難いもの、尊いもの、ハッキリしたものが我が心の中に生まれないう。どうしたものかと困ってしまった。

そこで、まだ聞法が足りぬ、もっと聞法を重ねていけばいつかはと、未来になお希望をもつていく人もある。またどれほど聞いてもなんともならず、張り合いがなくなつて聞法に力が入らなくなる人もある。あるいは自分の心にほとんど困ってしまったて、悶々とした日々を送る人もある。

さてここで今井師が言おうとされるのは、「信前もなく信後もなく一念もなく後念もなく信心もなく安心もな」い、いわば「ないないづくし」で「唯落ちる一つ」の助からぬ身の私。これが私の自性。

ところがよく聞くと、それだからこそ、南無阿弥陀仏は「そんなお前だから、まるまる引き受ける、我をたのめ、任せてくれよ」と仰せられ続けて下さっていたのであったとのお心でありましょう。

南無阿弥陀仏は「助けるための」引き受ける」の大悲の仰せであり、この仰せ一つをたのみ、この大悲の仰せ一つを仰ぐ。助からぬ者を助ける本願を成就して喚びかけて下さる南無阿弥陀仏を「慶賀感謝するのみである」と。

我が身を見ればいつも助からぬ身、空っぽの身、妄念ばかりの身、この身に離れがたくひつついていて下さるアミダ仏、その仰せが南無阿弥陀仏。いつもいつも「そんな者だから、引き受けるじゃないか、助けさせてくれよ」の仰せである。この大悲を聞くばかりで何も言うことはない、と。

ただ信心を頂きたいと願わず、いい話だから聞いておこうという程の場合には、今井師のこういう言葉を聞いても何の感銘もないであろう。

## 【住職雑感】

いつまでコロナは続くのであろうか。外出もままならない。おまけに尋常でない寒がりの愚老だから寒空に外に出るのがおっくうになる。それでも二月の終わりにになると春の兆しの明るい陽光を感じて、嬉しくなる。今日(二月二十六日)、ロシア軍がウクライナに侵攻を始めた。武力で以て一国の体制を変更しようという意図らしい。また大勢の人が殺されるであろう。悲しいことである。ロシアの言い分を聞くと、喉元のウクライナがNATOに加盟しアメリカの基地ができそうになってきたこととか、ウクライナはもともとロシアと民族的亦歴史的に一体な国だからとかの理由で、ウクライナという独立国の主権を侵して軍隊が入ってきたのは国際法違反であり、また極めて危険な行動といわざるをえない。ロシアの言い分は分からぬでもないが、武力・暴力で相手を言うことを聞かせようとすると、必ず後に困難を引きづっていくことになる。ロシアがもし民主的で平和な国家になっていくなら、ウクライナも自然にロシアに親和的になるであろうが、ロシアはなお独裁的である。中国も同じで、中国が民主的で自由な国になっていくなら、台湾が自主的に帰属することもあろうが、強権的な力で屈服させようとする限りたとえ台湾を征服しても、その傷は残り続けて中国は難儀な問題を抱え続けることになる。